

# 廃墟の芸術拠点「Tacheles」

## —その歴史と現在—

喜多 亮介<sup>1</sup>

### はじめに

私が暮らす神戸市と同じく、ベルリンもユネスコの創造都市ネットワークにおけるデザインの分野において認定された都市である。このことが、今回私をベルリンへの調査旅行へと駆り立てた直接の動機であったと言っても過言ではない。ベルリンという地で、今後の神戸市の都市開発・都市経営に関して何か一つ参考になるものを持って帰ることができたらという思いであった。

そんなことを考えながらの今回の調査旅行の中で、私が最も興味を抱いたのが、ベルリンの Mitte 地区、Friedrichstraße 駅から北側にある Oranienburger 通り一帯のエリア、そこにある廃墟の芸術拠点「Tacheles」である。この場所が持つ特殊なオーラと、廃墟をアートで甦らせたという一つの例として、大いに惹きつけられた。このレポートでは、Tacheles の歴史的経緯と現在の様子について記したいと思う。

### 1. Tacheles の歴史

まずは Tacheles がどういう歴史的経緯を経て今に至るのかを Tacheles の HP 等を参考にしながら概観したい。建物自体は 1907 年から 1908 年の間に 15 ヶ月かけて、Friedrichstraßenpassage という巨大なデパートとして建造された。この複合建築は Friedrich 通りから Oranienburger 通りに広がっていた。その通路には両端から入れる入り口があり、二つの主要な通り道をつなぐ役目を果たしていた。Friedrichstraßenpassage は当時ベルリンで二番目に大きく、また、ヨーロッパにおける建築物の中で長い廊下を持

つ建物の内、唯一現存する建築物でもある。その建設費用は合計すると約 700 万ドイツマルクに上ると言われている。この強化コンクリートで造られた建物は、そのファサードの造りや、長い廊下の構造などから正に典型的な初期のモダン建築の一例として挙げる事ができるが、クラシックやゴシックのスタイルも見ることが出来る。この建物はその後 Wolf Wertheim という人物によって賃借され、1909 年には新しい百貨店としてオープンし、1914 年、第一次世界大戦の前に競売にかけられる。1914 年から 1924 年の間はどのようにして使用されていたかははっきりとしないが、1924 年に深めの地下室が増築されたいい。

1928 年、建物は電機メーカーの AEG のショールームとして使用されることになる。「Haus der Technik」という名前に改名され、AEG の商品がディスプレイされたり、消費者に宣伝するスペースとして利用された。20 もの大きなディスプレイケースが展示され、最初のドイツのテレビ放送のうちの 하나가行われたりもしたようだ。

1930 年代に入ると、建物はナチス党员によって使用されることが多くなる。1930 年代の半ばには、ドイツ労働者党の事務所が設置される。1941 年には実質的に建物のオーナーがナチス党员になり、同時に SS 本部の事務所となる。最上階は、天窓を閉じ、フランス人捕虜を収容する場所として機能していたようだ。ベルリンの戦闘で、二番目の地下室が浸水し、今なお水の底にあるらしい。建物自体も第二次世界大戦の間に、度重なる爆撃を受け部分的に破壊されたが、幸いにもその大部分は破壊を免れた。

1948年から後は、東ドイツ政府の元に引き継がれ、建物は様々な目的で使用されることになる。様々な小売商人や手工業職人が、一時的にその廃墟（特に **Friedrichstraße** 側）に移住し、旅行代理店が修理された通路といくつかの階を使用した。他にも、各種の教育施設や、機器メーカーの事務所、劇場などが設置され、地下室は人民軍によって使用されていた。しかし、建物の取り壊しが進み、残された部分も廃墟化して、長い間使用されることはなかった。

本格的な取り壊しが 1980 年に始まる。建物の残っている大部分は 1990 年の 4 月に取り壊すことが計画されるが、その二ヶ月前の 1990 年の 2 月 13 日に、「**Künstlerinitiative Tacheles**」という団体によって建物が不法に占拠される。このグループは東西ドイツの若手アーティスト 50 人ほどからなる団体で、この建物の法的な責任を持つベルリン・ミッテの建築部門に議論を持ちかけ、建物を歴史的な文化遺産として登録することで、建物の取り壊しを防ごうとした。このアーティストたちの先導によって、新しい調査が実施された。建物構造の完璧な状態が評価され、驚くほどの素晴らしい形状と歴史的な価値を持つものとして認識されることになる。そのステータスは 1992 年、公的に認められる。1989 年の 11 月にベルリンの壁が崩壊してから、それまでは国家によって抑制されていた自由な気風を持つカルチャーが、元東ドイツであったベルリンのミッテ地区で広まり、各国から自分のライフスタイルに合わせて使用することができる場所を求めてアーティストたちが集まってきた。その気運の中で、独特の個性と歴史を持った **Tacheles** は、アーティストたちにとって非常に魅力的な存在であった。そして、次第に「**Tacheles**」としてミッテ地区のカウンターカルチャーを担うアートの中心となっていく。安い賃貸料でアーティストたちに制作と展示、販売の場を与え、映画館や

ホールなども設置された。ダンスパフォーマンスやオーケストラなどの公演も行われ、まさに新しいカルチャーの拠点として確固たる地位を築いていく。今日では主要な観光ガイドブックにも掲載され、年間 30 万人もの観光客が訪れるというベルリン・ミッテの観光名所である。

## 2. 現在の **Tacheles**

さて、それでは現在、**Tacheles** はどのような場所で、どのような活動を行っているのだろうか。実際に私が訪れた経験を交えて述べたい。

**Tacheles** の建物内部には、元々がショッピングセンターであることもあって、大小さまざまな空間が存在し、大きく 3 つのエリアに分けることができるであろう。本館ともいべきエリアでギャラリーやスタジオが密集した 6 階建ての建物部分、その隣に立つ別館とも言えるようなショップが入った棟、更に鉄製の数々のオブジェが展示されている庭部分だ。本館は **Oranienburger** 通りに面した入り口から入ることができるが、昼間でもかなり薄暗く、壁面に様々なグラフィティが施され、多くのポスターが貼られた様子は、何とも廃退的な雰囲気醸し出しており、このようなカルチャーに慣れていない人間は入るのを躊躇することであろう（写真 1）。しかし、完璧に観光地化された今日の **Tacheles** では、老夫婦や子供連れの家族、中年の男女の集団などが頻繁に出入りしているため、さしたる抵抗無く入ることができる。建物内部には、階層ごとにいくつかのギャラリーとスタジオ、バーやショップなどが存在する。ギャラリーと呼ばれる空間は、アーティストが作品を展示するやや大きめのものだ。作品制作と展示を同時に行うようなスタジオと呼ばれる部屋が約 30 存在し、オープンしている間はアーティストが制作を行いながら、訪れた客を対応していた。アーティストの国籍は様々で、私

が訪れたときは韓国人や日本人のアーティストもスタジオで作業を行っており、東北震災の被災者への募金を行っていたのが印象に残った。他にも服やアクセサリを販売するショップ、手製のネックレスやペンダントを販売するクリエイターたちが集まるエリアも存在し、多くの観光客で賑わっていた。そして、最上階のエリアは天窗から差し込む光が幻想的な空間で、ロシア人アーティストの描いた巨大な作品がいくつも展示されていた。

Tacheles 内で活動しているアーティストたちは本当に千差万別であり、そのアートの質も大きな相違があった。日本のマンガやアニメといったサブカルチャーに触発されたドローイング、キリストやマリアをセクシャルに揶揄したもの、ミニマルアートや抽象画、フォトグラフや映像作品、インスタレーションと多岐に渡り、学生レベルのものからかなりクオリティが高いものまで様々だ。

Tacheles の中に入って意外に気になるのが匂いだ。建物内の水道が止められているらしく、トイレは使用できないようで、日によ

ては相当ひどい悪臭（アンモニアとアルコールが混ざったような）が漂っていることもある。ただ、それでも、建物の壁面の隅々までグラフィティが施された様子は、建築物全体がひとつのアートと言っても過言ではない。戦前から現存する廃墟化寸前の建物と、動物的本能から生まれたような原始的で色鮮やかな無数のグラフィティが混然一体となった空間は、私がこれまで体験したことが無いような凄みと引きこまれたら戻って来られないような力の渦に満ち溢れていた。

隣の別館の方はギフトショップ兼ギャラリーのような様子である。定期的の中で販売されているものも変わるのであろうが、私が訪れたときは、雑貨やアクセサリ、イラスト、写真などが展示、販売されていた。更に、その店の入り口の横には広場があり、時間帯によってはここでもアクセサリなどの露店が多数出店されている。また、この広場はアーティストの憩いの場になっているらしく、酒瓶片手に談笑している様子や、隅の方で、イラストのカラーリングを行っている場面など



Tacheles 入り口 (写真1) 2011/9/18



Tacheles 庭 (写真2) 2011/9/18

が時々見られる。

庭の方だが、実は、私が訪れたときは雨がひどくあまりじっくりとは観察できていない。少し見た感じだと、あまり整備されていない空き地をフェンス等で区切り、ところどころに不可思議なオブジェが展示されているといったところだ。

私が訪れたときは、鉄製のオブジェが数多く展示されていた。トタンと板を工夫して立てられた小屋が並んでおり、それらをアーティストたちはアトリエとして活用しているらしい（写真2）。

Tacheles はこういった場所でアーティストたちに比較的格安な賃料でスタジオやギャラリーを提供し、アーティストたちの制作活動を補助する役目を果たす。確かに、少々不健康な雰囲気を漂わせているが、様々な文化を受け入れるオープンで自由な感覚と創造へのパワーに満ち溢れている空間ではある。更に、とにかく成功したいというアーティストたちのハングリーな精神がよくも悪くも滲み出ていた。「作品の写真を撮影したらここにチップを入れて」という箱や、twitter 上での宣伝を求めるメッセージなど、なりふり構わずといった姿勢は、行き過ぎなところもあるが、成功を求める上で重要な部分でもあろう。

知り合いのアートマネージャーがこの Tacheles の雰囲気を「学生会館」（日本の大学で学生のサークルが活動する建物）と言っていたが、この発言は非常に適切だと思った。優良なものから劣悪なものまで混じりあい、しかし、自由と可能性に満ち溢れ、退廃的だが同時に爆発的なパワーも兼ね備えた場所。確かにこういった空間も都市には必要なかもしれない。

### 3. Tacheles が直面する困難

さて、後日調査して明らかになったのであるが、私がちょうど Tacheles を訪れた 2011 年の秋というのは、Tacheles にとってはその存続が危ぶまれる困難な時期であったようである。2008 年に元の所有者との契約が終了したこの建築物は、現在、ハンブルクを拠点とする HSH Nord Bank の所有物となっている。このオーナーが、Tacheles を含んだこのミッテの一等地を競売にかける計画を発表したのだ。アーティストたちを立ち退かせ、このエリアを再開発し、もっとオシャレで贅沢な空間へと転換させたい投資家たちの存在と、HSH Nord Bank 自身が抱える負債の影響がその背後にある。ある専門家の調査によれば、この辺り一帯の地価は 8 千万ユーロに上ると算出されているらしい。もちろん、Tacheles 側や、Tacheles を支援する団体はあらゆる法的な手段を尽くして、アーティストがこれから先も滞在できるよう努力してきたが、法的にはオーナー側に権利がある以上、状況は Tacheles 側にとってかなり不利らしい。

2011 年 4 月 4 日、HSH Nord Bank はアーティストたちの立ち退きを計画していたが、実行されることはなかった。その代わりに、その翌日、Gruppe Tacheles という 80 人ほどのアーティスト集団が 100 万ユーロの資金を受け取る代わりに Tacheles から立ち退いた。その影響でそれまであったバーやレストラン、外のアトリエが閉鎖された。彼らは、これ以上法的に Tacheles の存続のために争うことが困難であり、受け取った資金を新しいプロジェクトのために使うと述べた。現在、Tacheles には Gruppe Tacheles とは違うアーティストたちが未だ滞在しており、ベルリンの文化の象徴を残すために、Tachles 存続への努力を続けている。私が Tacheles を訪れたときも、「I support Tachles!!!」というメッセージが書かれたポスターやビラが至る所に貼られ、Tacheles 存続を求める署名がギャラリー

ーの中で行われていた。デモや集会といったイベントも時々行われていた。が、法的にみて、Tacheles の存続には多額の資金を必要とし、それを可能にすることは中々難しいように思う。

### おわりに

廃墟となった建物をアーティストが占拠して活動の拠点にする行動の可能性と困難性を Tacheles は示している。このままだと Tacheles は確実に存続不可能であろうと感じる。そう私を感じる一つの要因として、いくらかのアーティストたちが立ち退いてしまったことも影響していたと思うが、私が数回訪ねたときに感じた、Tacheles 全体を覆うぬるま湯に浸かっている雰囲気がある。あまりにも観光化が進んだためアートとしての洗練性が失われた観光客向けに売れる作品を販売するものや、売りつけようとする姿が目につい

た。道端の露店で手に入るようなアクセサリや雑貨、学生レベルの旧時代的なドロ잉ング…、消費され宙に消えていくだけのような作品が溢れた空間に残す価値があるのだろうか。

しかし、それでも Tacheles という建築物自体が持つ、戦前から続く歴史的な意味合いや、自由で創造性に満ちた空間というものには社会的な価値があると私は思う。Tacheles が消えてしまうのは、時代の流れとして容認すべきことかもしれないが、このミッテ地区からこういった自由な場所が消えてしまうのは実に惜しいことだ。

2012 年現在、Tacheles はかろうじて存続しているようだが、自身が持つ歴史的、社会的な意味合いを自覚して努力して欲しい。そして我々もこの廃墟の芸術的拠点の動向から、アートと地域の関係性において学ぶべき点が大いにあるだろう。

---

1 神戸大学大学院国際文化学専攻芸術文化論 博士前期課程。

### ◆参考文献

- 「地球の歩き方」編集室編（2011）『地球の歩き方 ドイツ』ダイヤモンド社  
中村真人（2009）『素顔のベルリン』ダイヤモンド社  
若月伸一（2006）『ベルリン アートな散策』織研新聞社

### ◆参考ウェブサイト

- kunsthau tacheles. <http://super.tacheles.de/cms/>  
m & c news. „Tacheles Art House battles with banks for survival.“  
[http://www.monstersandcritics.com/news/europe/features/article\\_1578551.php/Tacheles-Art-House-battles-with-banks-for-survival-Feature](http://www.monstersandcritics.com/news/europe/features/article_1578551.php/Tacheles-Art-House-battles-with-banks-for-survival-Feature)  
The Local Germany's News in English. „Art icon Tacheles shrinks after €1-million payout.“  
<http://www.thelocal.de/society/20110405-34205.html>  
Wikipedia. „Kunsthau Tacheles“  
[http://en.wikipedia.org/wiki/Kunsthau\\_Tacheles#cite\\_ref-a\\_1-1](http://en.wikipedia.org/wiki/Kunsthau_Tacheles#cite_ref-a_1-1)